

# ほっかいどう学の可能性と必要性

札幌市立屯田小学校 校長 新保 元康

「子どもたちが北海道のことを学ぶ機会がもっと必要ではないか」この提言が取り上げられ、今の北海道総合開発計画に「ほっかいどう学」の促進が盛り込まれています。ここではこの考えにたどり着くまでの原体験等を書いてみます。この小文に目を留めている方たちには周知のことばかりと思いますが、「ひとりの小学校教師の驚き」の視点にしぼしお付き合いください。

## <札幌大橋を歩く>

20年ほど前に、国道337号にかかる札幌大橋を歩いて渡ったことがあります。あいの里から当別に向かって、4車線になる前の橋985.3mを歩きました。当時教えていた北海道教育大学附属小学校の子どもたちに、石狩川捷水路のことを教えようとして、まず、自分自身が実際に見たいと思い立ったのです。

札幌大橋は、激しく揺れていました。

大型トラックが通ると、正直、怖くなるほどの揺れです。車で渡っているときには全く気がつきませんでした。橋はいつも揺れているものだということを知りませんでした。車による振動はもちろん、風の影響等も加味しながら、さらには北海道の場合、雪や氷の加重のことも計算されてつくられているのだろう、そんなことを考えながら歩き、橋の中央部へ。

その下流に見える当別捷水路と生振捷水路おやふるの光景には正に息をのみました。視界の端から端までに広がる川と河川敷。ここを昔の人々が掘ったのだ。鳥肌が立ちました。十分な道具も資金もなかったであろうかの時代に、これを成し遂げんとするそのエネルギーはどこからわき起こるものなのか。この驚きこの感動を子どもたちに伝えたい、心の底からそう思いました。

## <調べれば調べるほど面白く深い 北海道の歴史>

現在、私の勤務する屯田小学校の隣には、江南神社があります。

ご存じの通り、江南の「江」とは、石狩川のことです。屯田地区は、旧石狩川の南岸に接する村としてスタートしました。ですから江の南にある神社＝江南神社というわけです。

川を表す漢字には「川」「河」「江」があります。「江」は、中国の長江に使われていることから明らかとなり、最も規模の大きな川です。私は石狩川を日本第3位の川とだけ認識していましたが、そんな生やさしいものではないことが次々と分かってきます。

流域面積は日本2位。ここを毎年のように水害が襲ったこと。そのほとんどが耕作不適な泥炭地だったこと。捷水路によって、水位が下がり土地の乾燥が一気に進み、今や日本屈指の稲作地帯になったこと。その陰の立て役者、土管による暗渠排水あんきょは、農業における産業革命とも言えるものだったこと。蒸気機関が紹介されたと言われる1851年のロンドン万博では、土管製造機も出品され「農業の近代化の始まり」だったのかも。世界の産業革命と北海道の開拓には密接な関連が等々。

しかし、こうした石狩川の物語は、全く北海道の子どもたちに知らされていないのです。

「北海道は、新潟県と並んで日本一、二のお米の生産をしている」ということは学びますが、その背景にある壮大なドラマは、ほとんど伝えられていません。そもそも、暗渠排水用の土管など見たことも聞いたこともないでしょう。

## ＜「日勝峠」ってどこですか＞

北海道のことを知らないのは、子どもだけではありません。そもそも教師が知らないのです。

平成28年の台風10号豪雨で、日勝峠は壊滅的な被害を受けました。「道央と道東を結ぶ大動脈の切断は重大事である」と職員室で語っていると、若い教師に聞かれました。「ところで校長先生、日勝峠ってどこにあるんですか」あまりにも純朴な質問に、私はぼかんとしてしまいました。札幌で生まれ育った優秀な若手教員が、日勝峠を全くイメージできないのです。今、教師の世代交代が急速に進みつつあります。私のような昭和世代が大量退職、平成生まれの教師が大量採用されています。優れた人材が集まっていますが、北海道のことはあまり知りません。なぜでしょうか。彼らは、北海道のことを十分に学ぶ機会がなかったのです。そして、その状況は今も続いています。

平成28年の豪雨では、十勝平野は畑の表土も流され、大変な被害を受けました。回復に10年かかると言われていますが、この意味もほとんどの教師は知りません。畑は、人間の努力によって意図的にコツコツとつくられてきたものだとは知らないのです。畑を見て「北海道の自然は素晴らしい」と感動するだけです。

十勝平野は、自然のままでは火山灰土で生産性の高い土地ではありません。それを長年の人々の努力によって、おそらくは多大なる国費の投入と合わさって、ようやく今の豊かさが実現できているのです。食料自給率1,100%は、自然の賜であると同時に、人々の汗の結晶そのものなのです。しかし、それを教師も子どももおそらくは多くの道民も知りません。

## ＜副読本がない北海道＞

実は、昭和55年以前は4年生で北海道の学習がかなり濃密に行われていました。「わたしたちの北海道」という副読本が出版され、全道のかなり多くの学校で使われていたようです。しかし、昭和55年に学習指導要領が改訂された後は、北海道全体に関する学習は大

きく減少し現代に至っています。「わたしたちの北海道」は既になくなり、札幌市では、3年生でも4年生でも「わたしたちの札幌」という副読本が使用されています。これでは日勝峠を知らないのも、石狩川や十勝平野の成り立ちを知らないのも当たり前です。

私は、他の県でも県単位の副読本はなくなっているのだと思い込んでいました。

ところが、少し調べてみるとそうではなかったのです。例えば、愛知県では副読本「かがやく大愛知」（尾張教育研究会社会部会編集：136ページ）が4～6年生で使用され、岩手県では、副読本「あたらしいきょうど岩手」（岩手県社会科教育研究会著：164ページ）が3～6年生で使用されているのです。いずれもフルカラーの大変立派な副読本です。愛知県や岩手県の子どもたちはこの副読本を3、4年間使い続けて自分の県の素晴らしさを学んで大人になるのです。

岩手県の5倍、日本一の面積を誇る北海道では、そうした副読本さえないのです。北海道の全貌を学ぶ機会が少ないまま子どもたちは大人になっていきます。

北海道の鉄道網はもはやずたずたです。そして、沿線住民以外は、ほとんど関心をもっていないかのようにも感じます。北海道民であるという意識が十分育っていなければ、こうした無関心も当然のことです。

このような環境で育った子どもたちも、18歳になれば選挙権を得ます。わが北海道のことを十分知らないままで良いのでしょうか。

## ＜「北海道人」意識を育てましょう＞

地方自治を成り立たせているのは、自分がその地方のメンバーであるという意識であるに違いありません。道内179市町村それぞれでわがまち意識が育てられているとしても、「北海道民」意識がなければ、北海道の未来は心配になります。

奇しくも今年には北海道150年。次の150年のために、学校だけでなく広く社会の皆さんと手を組んで、積極的に道民意識を育てていきたいと願っています。

\*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。

<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>

また、平成30年2月、「ほっかいどう学」プロジェクトチームにより「ほっかいどう学」紹介のリーフレット「ほっかいどう学～北の大地と先人たちが織りなす物語～」(発行：(一財)北海道開発協会)が作成されています。

※ ほっかいどう学考第3回は、6月号の予定です。